

令和6年度「生活者としての外国人」のための特定のニーズに対応した日本語教育事業
【地域日本語教育実践プログラム】

実施内容報告書

団体名： 学校法人学習院

1. 事業の概要

事業名称	大人の学びを支える日本語学習環境作り ー共生社会における地域と大学の連携ー
日本語教育活動に関する特定のニーズの実情や課題	【本事業で想定する「特定の課題に対する学習ニーズ」（特定のニーズ）を有する主たる対象】 ○非漢字圏の在住外国人や中高年層の在住外国人のうち、日本語未習者、あるいは学習経験はあるものの文字の学習・習得に困難を抱える人。 【本事業で想定する「特定の課題」】 ○文字学習に困難があり、読み書き能力が身に付きにくい外国人は、ごく限られた範囲でコミュニケーションを行い、情報を自ら収集することができないという不便さを抱えている。また、文字に関わる能力が伸びないことにより、日本語学習が停滞する場合も少なくない。結果として、日本で暮らしながらも、日本人と直接コミュニケーションせず、相互に存在を認識することなく生きているという状態の人もいる。 この状況を脱し、生活者としての外国人が社会の一員として十全な生活を営むことを可能にするためには、基本的な日本語能力を身に付けられる教育体制を整備する必要がある、なかでも、後回しにされがちな読み書き能力の向上の場を作ること、それを支える文字学習の機会を保障することが求められる。 これまで、本学が開催してきた日本語教室には、40代から60代の学習者が数多く参加している。現在の国内在住外国人の40歳以上の層は約35%（2023年6月末、法務省）だが、本学教室の場合は半数以上が40歳以上であり、彼らの多くは、(1)高い学習意欲を持っているにもかかわらず、意味理解、音韻処理、文字識別に苦勞していたり、(2)年齢、母語、言語学習経験の希薄さによる影響を強く受けていたりする。しかし、従来の教室では、読み書き能力に関わる活動を効果的には行えておらず、区内の他の教室でも同様である。また、各種の自学アプリを紹介してはいるが、学習者はそれらを使いこなしていないということもわかってきた。 以上により、本事業では、中高年層の学習者や非漢字圏の学習者に対し、文字学習に対する困難を軽減することを課題に据えることとした。 【本事業で想定する上記の「特定の課題」に対する学習ニーズ（特定のニーズ）】 ○生活上必要となる読み書き能力の基礎、日本語学習を支える読み書き能力を身に付けることである。

事業の目的	外国人が日本社会で十全な生活を送ることを目指した学習環境を整える。2024年度からは、文字に関わる能力、読み書き能力に焦点を当て、日本に暮らす外国人の生活しやすさが向上すること、日本語学習のしやすさが増すことを目指す。具体的には、以下を行う。 1. 日本語未習者及び学び直しが必要な学習者に対する初期集中日本語教育プログラムに連動させて、文字学習・読み書きの学習に重点を置いた授業を展開する。 2. 学習者が、文字学習の楽しさややりがいを感じられるようになり、生活の中で積極的に読み書きに取り組めるようになることを目指した授業を計画し、それに適した教材を作成する。
事業内容の概要 (課題をどのように解決したのか、どのような点が先進的な取組であったのか分かるように記載)	1. 文字学習を重視した初期日本語教育の実施 (1) 文字学習も重視する初期集中日本語教育の実施：「生活者としての外国人」に対する初期集中日本語教育に文字学習を有機的に取り入れた。たとえば、生活Can doの「読むこと」としてA1レベルとされている「ファストフード店やレストランなどでメニューを見て、自分が知っている食べ物や飲物の名前など、いくつかの情報を理解することができる。」(No.129)を達成するために必要な文字、「読む」ストラテジーを、学習の初期段階から指導した。その際、生活場面と切り離さないことを原則としつつ、文字指導にありがちな単調な練習はなるべく排除し、連想法、芸術としての文字表現を取り入れた。さらに、仲間と共に学ぶことの利点を活動に生かし、文字学習が楽しくかつやりがいのあるものとなるよう、教室活動を設計し、適した教材を作成した。また、学びたいと思った時、あるいは来日して間もない時期に、間を置かずに学習が始められるよう、さらには、通いやすさが増すよう、異なる時期・場所で、コースを運営した。 (2) 自立を目指す日本語教育の実施：初期集中日本語教育に続くクラスを設計・実施した。日常的・定型的なやり取りはできるが、継続的・自律的な学習や日本人との交流が困難である外国人に対し、自己調整学習の理念・方法を取り入れたプログラムを提供した。初期集中日本語教室に行った文字学習を基礎として、文字学習を自律的に行えるようになることを目指し、学習ストラテジーを学ぶことをコースの中に組み込んだ。さらに、文字によって自分の考え等を表現・発信することも行い、交流や社会参加を促した。
事業の実施期間	令和6年5月 ～ 令和7年3月 (10か月間)

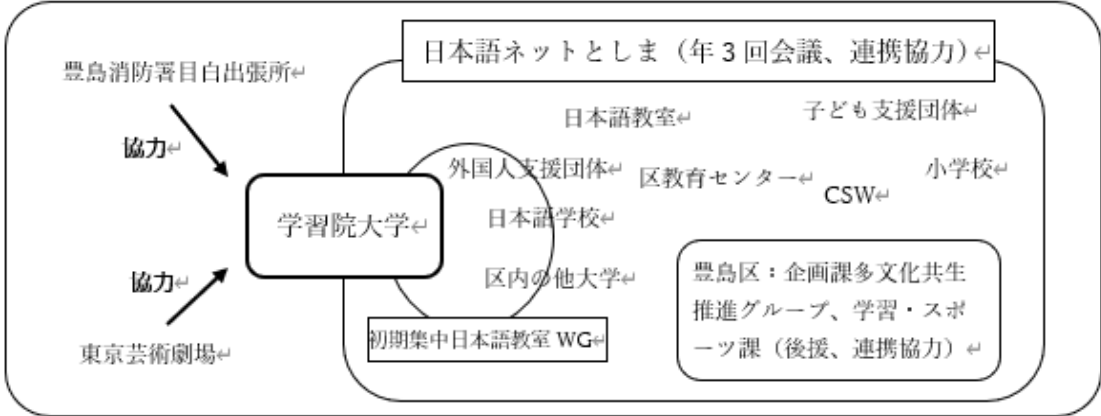
2. 事業の実施体制

(1) 運営等委員会

実施体制	構成員の人数：9人 構成員の主な属性や専門性： 1. 衣川隆生（日本女子大学文学部教授：日本語教育、自己調整学習） 2. 文野峯子（人間環境大学名誉教授：教師教育、日本語教育、教室活動分析）
------	---

	3. 米勢治子（東海日本語ネットワーク副代表：地域日本語教育） 4. 田室寿見子（東京芸術劇場事業企画課人材育成担当係長：舞台芸術における人材育成・教育普及） 5. 岡田麻矢（豊島区文化商工部学習・スポーツ課生涯学習係長：社会教育） 6. 中川祐治（大正大学文学部教授：地域日本語教育） 7. 金田智子（学習院大学文学部教授：日本語教育、日本語教育における内容と方法） 8. 中上亜樹（学習院大学文学部准教授：第二言語習得、日本語教育） 9. 柳本大地（学習院大学国際センター准教授：日本語教育、認知心理学） 運営方法：以下のように3回の運営委員会を対面で開催した。 第1回：令和6年9月20日（金）10：00-12：00（学習院大学中央教育研究棟507教室） 第2回：令和7年1月8日（水）15：00-17：00（学習院大学中央教育研究棟507教室） 第3回：令和7年2月22日（土）11：00-12：50（学習院大学西5号館301教室）
--	---

（2）地域における関係機関・団体等との連携・協力

連携体制	 2019年に学習院大学を拠点として、豊島区の文化商工部学習・スポーツ課生涯学習グループ及び政策経営部企画課多文化共生推進グループとの協働により、区内日本語教育関係機関のネットワーク「日本語ネットとしま」が発足した。これにより情報交換・意見交換が活発化し、連携協力が進んでいる。2019年度～2020年度に実施した調査（日本語教育機関・組織対象調査、在住外国人対象調査）の結果を踏まえ、区内日本語教育体制における課題及びその解決方法についての検討を行い、初期集中日本語教室を区内で複数回実施するためのワーキンググループ会議（2024年5月27日）を開催し、今年度も3期に渡る初期集中日本語教室を協力して実施した。 従来、日本語教育の実施において、消防署、区民ひろば、国際交流団体に出張授業等の依頼をして連携を図っており、2021年度からは地域日本語教育の場で多文化共生に向けての貢献をしたいという専門家集団（東京芸術劇場）によるワークショップなどを行っており、今年度も消防署、東京芸術劇場には「自立を目指す日本語教育の実施」において協力を得た。
------	---

(3) 中核メンバー及び関係機関・団体による本事業の実施体制

実施体制	役割	主に担当する取組	氏名	所属・職名
	事業担当者	全ての取組	金田智子	学習院大学文学部・教授
	事業担当者	日本語教育の実施	中上亜樹	学習院大学文学部・准教授
	事業担当者	日本語教育の実施	柳本大地	学習院大学国際センター・准教授
	地域日本語教育 コーディネーター	成果の発信・普及 人材の育成	唐木澤みどり	学習院大学国際センター・PD共同研究員(非常勤)
	地域日本語教育 コーディネーター	日本語教育の実施	渡辺陽子	学習院大学国際センター・専門嘱託
	地域日本語教育 コーディネーター	日本語教育の実施	良永朋実	学習院大学国際センター・PD共同研究員(非常勤)
	地域日本語教育 コーディネーター	日本語教育の実施	澤口瑠璃	文化外国語専門学校・専任講師
	地域日本語教育 コーディネーター 指導者	日本語教育の実施	関根千紘	学習院大学人文科学研究科・博士後期課程学生
	指導者	日本語教育の実施	程陽	学習院大学人文科学研究科・博士前期課程学生

3. 各取組の報告

運営等委員会の設置	
【名称：運営委員会（地域日本語教育体制づくり検討委員会）の開催】	
取組の目標	取組2・3の計画・実施の各段階における報告に対し、委員はそれぞれの専門性を生かして情報提供や助言を行う。それをもとに、取組の担当者は取組の内容や方法を改善する。委員は、事業の目的・目標に照らし、各取組及び事業全体について、妥当性や先進性、汎用性を観点とした点検・評価を行う。

内容	委員会において、事業担当者は取組 2・3 の計画や進捗状況を報告した。委員はそれぞれの専門性（自己調整学習、教室活動分析、地域日本語教育、芸術を通じた人材育成等）を生かして情報提供や助言を行った。 日本語教育プログラムの内容・方法については、自己調整学習や授業分析、認知心理学、SLA の専門家（衣川委員、文野委員、柳本委員、中上委員）が、芸術を通じた特別活動・地域連携については人材育成や社会教育の専門家（田室委員、岡田委員）が、そして事業全体の妥当性、先進性、汎用性については、地域日本語教育の課題や状況を熟知し、指導的立場にある 2 名の委員（米勢委員、中川委員）が中心となって、情報提供や点検・評価を行った。併せて、取組 2 については外部委員に会議以外でも、報告及び見学の機会を設け、助言を受けた。		
本取組により検討された事業の方針や特定のニーズに対応した日本語教育の方向性	日本語学習の継続が難しい学習者が、日本語の基礎とともに継続して学ぶ力を身につけるために、ポートフォリオについての検討が行われた。委員より意見やアイデアが出され、日本語教育の実施においては学習の振り返りを促すためにより工夫していくことが確認された。初期集中日本語教室の教師用指導書の作成が報告され、初期の地域日本語教育の指導方法に関し、アドバイスを受けた。		
実施期間	令和 6 年 9 月 20 日 から 令和 7 年 2 月 22 日 まで	開催時間・回数	1 回 2 時間 × 3 回 = 6 時間

特定のニーズに応じた日本語教育の実施 【名称： 初期集中日本語教室】 【 第 1 期 学習院大学わくわくとしま日本語教室<わくわくクラス>（於学習院大学）】 【 第 2 期 学習院大学わくわくとしま日本語教室<わくわくクラス>（於メロス言語学院）】 【 第 3 期 学習院大学わくわくとしま日本語教室<わくわくクラス>（於大正大学巣鴨街なかキャンパス）】	
取組の目標	基礎的な日本語能力を持たない「生活者としての外国人」が、生活に必要な日本語の基礎を身に付け、日常生活の中で日本語を使えるようになる。特に、生活に必要な文字、生活の中での「読むこと」、「書くこと」において、基礎となる文字や読みものの構成などが学べるコース設計を行う。これらを可能とする初期集中日本語教室を、他の日本語教育機関(大学・日本語学校)と協働で複数(3 か所)開設する。
内容	文字学習も重視する初期集中日本語教室 確実に日本語能力が伸びることをねらい、1日3時間、週5日間、3週連続で行う集中的なコースとした。「日本語の基礎」を身に付けることを目的に、生活に必要な日本語を学んだ。その際に、非漢字圏学習者、中高年層学習者の文字学習の課題に配慮し、生活のための日本語の具体物に関連付けながら、読み書きの区別、必要性による優先順位付けを行った上で、文字の識別練習、連想法を始めとする学習戦略、各種文書の「構成」に対する意識づけ等をコースの中に取り入れた。 令和4～5年度にかけて作成したカリキュラム(「学び続けるための基礎」づくりのため、「生活Can do」を参照して作成したもの)に上記内容を組み込み、カリキュラムを再

		構成した。上述の文字学習及び読み書き学習に関する教材を新たに作成した。来日後、あるいは、学びたいと思った時に間をおかずに学習が開始できるよう、また、通いやすくなるよう、異なる時期、異なる場所で実施した。	
取組による特定のニーズに対する工夫		1. 生活ですぐに実践でき、人間関係を広げることを促す内容、「読むこと」「書くこと」に関する Can do を、標準的なカリキュラム案及び「生活 Can do 一覧表」から選定し、シラバスを構成した。 2. コミュニケーション重視の方針を取りながらも、文字学習も重視し、連想法などの記憶ストラテジーを取り入れた活動を行った。 3. 日本語を学び続けるためには、動機・意欲の維持向上は欠かせない要素であるため、学習者や指導者以外の人と直接にやり取りをする機会や文字によって表現・発信をする機会をプログラムの中に設けた。 4. 自主作成教材（含. 学習ポートフォリオ）、公的な各種リソース、ICT を活用し、対面での教室活動と個別学習の両方を豊かなものにした。 5. 学習効果をあげ、文字に関わる能力の伸長を実感できるよう、第1期初期集中日本語教室「学習院大学わくわくとしま日本語教室くわくわくクラス」では、授業を3週間、毎日（週5日）3時間ずつ実施した。尚、第2期初期集中日本語教室くわくわくクラス」では、2週間、毎日（週5日）3時間ずつ実施し、第3期初期集中日本語教室くわくわくクラス」では、3週間、毎日（週5日）2.5時間ずつ実施した。 6. 文化庁や国際交流基金が開発した ICT 教材等を教室活動に結び付け、日本語の基礎と学び方を身に付けることを促した。	
実施期間	第1期： 令和6年8月19日から 令和6年9月6日まで 第2期： 令和6年9月30日から 令和6年10月11日まで 第3期： 令和7年1月27日から 令和7年2月14日まで	授業時間 ・コマ数	第1期：1回 3時間×15回 =45時間 第2期：1回 3時間×10回 =30時間 第3期：1回 2.5時間×15回=37.5時間
対象者	豊島区及び近隣区域に暮らす 外国籍等住民 日本語未習者	参加者 (人=実人数)	第1期：総数 13人 (受講者 6人、指導者・支援者等 7人) 第2期：総数 12人 (受講者 11人、指導者・支援者等 1人) 第3期：総数 22人 (受講者 8人、指導者・支援者等 14人)

日本語教育の言語技能とレベルについて	「日本語教育の参照枠」基礎段階の言語使用者 A1 レベルの内容を扱った。 自立を目指す日本語教室「ぐんぐんクラス」を継続して受講することにより、漢字圏学習者は5言語活動すべてにおいてA2.1を目指し、非漢字圏学習者は「読むこと」「書くこと」において、A1レベルを目指した。「基礎漢字」については授業の内容に準じて扱うにとどめるが、電子辞書等を使って知らない漢字について調べられるようになることを目指した。									
日本語教育の対象とする生活上の行為について	【大分類】Ⅰ健康・安全に暮らす、Ⅲ消費行動を行う、Ⅳ目的地に移動する、Ⅶ人とかかわる、Ⅷ社会の一員となる、Ⅸ自身を豊かにする、Ⅹ情報を収集・発信する 【中分類】01健康を保つ、02安全を守る、05物品購入・サービスを利用する、07公共交通機関を利用する、14他者との関係を円滑にする、15地域・社会のルール・マナーを守る、19学習する、20余暇を楽しむ、21通信する 【小分類】(01)医療機関で治療を受ける、(02)薬を利用する、(05)災害に備え、対応する、(08)物品購入・サービスを利用する、(12)徒歩で移動する、(31)人と付き合う、(34)住民としてのマナーを守る、(42)日本語を学習する、(44)余暇を楽しむ、(46)インターネットを利用する									
使用した教材・リソース	自主作成教材：紙版、音声 ウェブサイト：「つながるひろがるにほんでの暮らし」、「日本語能力自己評価ツール『にほんごチェック!』」 アプリ：「HIRAGANA Memory Hint」、「KATAKANA Memory Hint」、「Kanji Memory Hint」、「Voice Tra」									
受講者の出身（ルーツ）・国別内訳（人）	第1期 学習院大学わくわくとしま日本語教室くわくわくクラス>									
	中国	韓国	ブラジル	ベトナム	ネパール	タイ	インドネシア	ペルー	フィリピン	日本
	1	1								1(シリア)
	ジンバブエ(1人)、台湾(1人)、バングラデシュ(1人)									
	第2期 学習院大学わくわくとしま日本語教室くわくわくクラス>									
	中国	韓国	ブラジル	ベトナム	ネパール	タイ	インドネシア	ペルー	フィリピン	日本
	5	1								
	イギリス(1人)、ウクライナ(2人)、コンゴ(1人)、ロシア(1人)									
	第3期 学習院大学わくわくとしま日本語教室くわくわくクラス>									
	中国	韓国	ブラジル	ベトナム	ネパール	タイ	インドネシア	ペルー	フィリピン	日本
	4									
	スペイン(1人)、タイ(1人)、フランス(1人)、ミャンマー(1人)									

（１）特徴的な活動風景（２～３回分）

取組事例①

【第１期初期集中日本語教室 学習院大学わくわくとしま日本語教室くわくわくクラス>

第10回 令和6年8月30日】

テーマ：災害に備える

災害時のアナウンス（走らないでください等）を理解して適切に行動する練習のほか、防災グッズについて使い方を人に尋ねて、実演しながら説明してもらう活動、地図や表示物から、「避難所」の文字を探したり、防災地図を見ながら自宅付近の避難所を探す活動を行った。

写真左：防災グッズの使い方を尋ねる活動の様子

写真右：防災地図を見て自宅に近い避難所を探す活動の様子



取組事例②

【第３期初期集中日本語教室 学習院大学わくわくとしま日本語教室くわくわくクラス>

第15回 令和7年2月14日】

テーマ：学習のまとめ

3週間学んできたことのまとめとして、学習してきた場面からいくつかを取り上げ、各場面でのタスク活動を行った。一度学んだことを再度やってみることで、学習者は自身の能力の伸長を振り返り、指導者・支援者はタスクの相手を演じながら、達成度を評価した。

教室内にレストラン・病院・知り合いの家などの場面のブースを設け、指導者と支援者が店員や医師などの役割を演じた。学習者は、ブースでのやり取りのタスクのほか、通行人役の支援者に道を尋ねるたり、予期せぬタイミングで発生する災害時のアナウンスを聞いて適切に行動したり、知り合いの家を訪問後、お礼のメッセージを日本語で入力する、といったタスクにも取り組んだ。

写真左：「知り合いの家を訪問する」ロールプレイの様子

写真右：「レストランで注文する」、「病院で診察を受ける」ロールプレイの様子



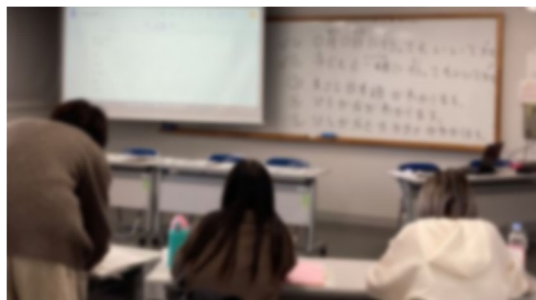
特定のニーズに応じた日本語教育の実施			
【名称：自立を目指す日本語教室＜ぐんぐんクラス＞】①ぐんぐん夏クラス、②ぐんぐんクラス			
取組の目標	よく使われる日常的表現を用いたやり取りならできるというレベルの「生活者としての外国人」が、公的機関や各種サークル等の活動に参加し、コミュニティの中で日本語を使い、自立的・自律的に学び続けるための基礎的な力を身につけ、催し等に主体的に参加したり、日本人とちょっとしたやり取りを行えたりするようになる。文字学習におけるストラテジーなどを活動に組み込み、自律的な文字学習が可能となることを目指す。		
内容	初期集中日本語教育に続くクラスとして、週1日（土曜日）3時間で、2つのコース①ぐんぐん夏クラス全7回、②ぐんぐんクラス全17回を設計・実施した。日常的・定型的なやり取りはできるが、継続的・自律的な文字・読み書き学習が困難である外国人に対し、自己調整学習の理念・方法、学習ストラテジーを取り入れたプログラムを提供した。さらに、②ぐんぐんクラスでは、芸術の専門家らの協力も得て、文字によって自分を表現・発信する活動も行い、文字学習への動機づけを高めるとともに、交流や社会参加を促した。仲間とともに学ぶこと、他者との交流が学習への動機づけにつながることを意識した。		
取組による特定のニーズに対する工夫	- 生活ですぐに実践でき、人間関係を広げることを促す内容を標準的なカリキュラム案及び「生活 Can do 一覧表」から選び、シラバスを構成した。 - 生活上必要となる読み書き能力の基礎、日本語学習を支える読み書き能力の基礎を身に付けるため、教材に読み書きに関するタスクを可能な範囲で取り入れるようにした。 - コミュニケーション重視の方針を取りながらも、言葉の意味やルールを学習者自身が発見していく活動や、自己調整学習の考え方を取り入れた活動を行った。また、学び続けるためには、動機・意欲の維持向上は欠かせない要素であるため、学習者や指導者以外の人と直接にやり取りをする機会や日本語を楽しむ機会をプログラムの中に積極的に設けた。 - 対面での教室活動と個別学習の両方を豊かなものにするために、自主作成教材（含、学習ポートフォリオ）、公的な各種リソースを活用した。また、学習ポートフォリオを使用することにより、他地域に移動した場合でも、無理なく学習が継続できるようにした。		
実施期間	① ぐんぐん夏クラス 令和6年6月1日 から 令和6年7月13日 まで ②ぐんぐんクラス 令和6年9月7日 から 令和7年1月25日 まで	授業時間 ・コマ数	① ぐんぐん夏クラス 1回3時間×7回=21時間 ② ぐんぐんクラス 1回3時間×17回=51時間
対象者	豊島区及び近隣区域に暮らす外国籍等住民。特に非漢字圏	参加者 人＝実人数	①ぐんぐん夏クラス 総数 17人 (受講者8人、指導者・支援者等9人)

	学習者、中高年層を対象とする。 日本語初歩レベル（「話すこと（やり取り）」のみA1程度）		②ぐんぐんクラス 総数 36人 （受講者12人、指導者・支援者等24人）							
日本語教育の言語技能とレベルについて	5つの言語活動全てについて日本語教育の参照枠における基礎段階の言語使用者であるA1レベルのものを扱い、「聞くこと」「話すこと（やり取り）」「話すこと（発表）」についてはA2のものも含めた。 修了する段階で、「聞くこと」「話すこと（やり取り）」「話すこと（発表）」についてはA2レベル、「読むこと」「書くこと」については、A1レベルを目指した。									
日本語教育の対象とする生活上の行為について	【大分類】Ⅰ健康・安全に暮らす、Ⅲ消費行動を行う、Ⅳ目的地に移動する、Ⅵ働く、Ⅶ人とかかわる、Ⅷ社会の一員となる、Ⅸ自身を豊かにする、Ⅹ情報を収集・発信する 【中分類】01健康を保つ、05物品購入・サービスを利用する、07公共交通機関を利用する、11仕事を探す、14他者との関係を円滑にする、16地域社会に参加する、20余暇を楽しむ、21通信する 【小分類】(02)薬を利用する、(08)物品購入・サービスを利用する、(10)電車、バス、飛行機、船等を利用する、(22)就職活動をする、(23)労働条件について理解する、(31)人と付き合う、(35)地域社会に参加する、(44)余暇を楽しむ、(45)郵便・宅配便を利用する、(46)インターネットを利用する、(47)電話等を利用する									
使用した教材・リソース	独自に作成した教材：紙版 ウェブサイト：「つながるひろがるにほんでの暮らし」、「日本語能力自己評価ツール『にほんごチェック！』」									
①受講者の出身（ルーツ）・国別内訳（人）	①ぐんぐん夏クラス									
	中国	韓国	ブラジル	ベトナム	ネパール	タイ	インドネシア	ペルー	フィリピン	日本
	2	1							1	
	ミャンマー（2人）、イギリス（1人）、スペイン（1人）									
	②ぐんぐんクラス									
	中国	韓国	ブラジル	ベトナム	ネパール	タイ	インドネシア	ペルー	フィリピン	日本
	3	3								
アメリカ（1人）、台湾（1人）、ジンバブエ（1人）、オランダ（1人）、バングラデシュ（1人）シリア（1人）										

役所や地域の掲示板やウェブサイトの短い簡単なお知らせ、チラシなどを読んで、日本語教室などの場所や日時、内容など必要な情報を探し出す練習をした。さらに、申し込みに必要な内容を把握し、メールで日本語教室に申し込みをする活動も行った。

写真右：チラシ等の情報を読み取るための練習の様子

写真左：各自のスマホで、日本語教室への申込メールを作成している様子



取組事例②

【ぐんぐんクラス第 16/17 回 令和 7 年 1 月 18/25 日】

テーマ：冬の思い出の料理を紹介する

第 16 回では、「冬の思い出の料理」として何を紹介したいか決め、料理（味、材料等）や思い出（いつ、誰と、等）について、表現を学びながら、ポスターを作成した。

第 17 回では、第 16 回で作成したポスターを完成させ、発表する内容を考えたうえで、一人ずつ発表と質疑応答を行った。

写真左：「冬の思い出の料理」のポスターを作成している様子（第 16 回）

写真右：「冬の思い出の料理」の発表を行っている様子（第 17 回）



(1) 目標の達成状況・成果（取組による特定のニーズの充足）

1. 初期集中日本語教室について

(1) アンケート結果から

コース最終日にアンケートを実施し、学習者からのフィードバックを得た。第1期は6件、第2期は9件、第3期は7件の計22件の回答を得た。

「日本語をよく使うようになったと思うか」、「教室に来る前よりも今のほうが日本語が上手になったと思うか」という質問に対して、全3期の回答者全員が、参加前と比べると向上したと答えた。

「日本で生活しやすくなったと思うか」という質問に対しては、第1期と第3期の回答者は全員が参加前と比べると向上したとする回答だったものの、第2期は3名が変わらないという回答であった。

「日本の文化・社会・習慣について知っていることが増えたと思うか」という質問に対しては、増えたという回答は18件あり、「教室の外で日本語を勉強する時間は増えたと思うか」という質問に対しては増えたという回答は21件だった。

教室の内容への満足度を、「1 満足していない」から「5 かなり満足」までの5段階評価で聞いた。第1期から第3期までの全回答数22件のうち、4または5と回答したのは21件であり、3期いずれも満足度が高かったと言える。

「もっと日本語を勉強したいと思うか」という問いへの回答も同様に「1 思わない」から「5 かなり思う」までの5段階評価で聞き、5と回答したのは20件であり、日本語学習意欲が高まったことが窺える。

(2) 学習ポートフォリオから

第1期と第3期は本コースで自主作成した学習ポートフォリオを用いて、コース初日と最終日に自己評価を行った。授業各回のテーマ毎に設定されている目標に対して、「練習が必要」、「助けがあればできる」、「ひとりでもなんとかできる」、「ひとりでできる」の4段階で評価した。

全ての学習者が、出席した日のテーマについて、初日段階ですでに「ひとりでできる」と回答した項目を除いて、1段階以上自己評価が高まったと記述していた。

(3) コーディネーター・講師の観察から

休み時間や授業前後に、教科書やノートを広げて練習し合ったり、英語や母語を使いながらお互いの理解を確かめ合ったりしている様子が観察されたほか、第1期の参加者間でSNSのグループが自主的に作られ、時折日本語を使ったやり取りを行うなど、短期集中的に同じメンバーと初歩から学ぶことで、ともに学び合う仲間同士という連帯感を強めていった様子が見られた。

また、第1期の最終日の翌日から自立を目指す日本語教室＜ぐんぐんクラス＞が開始するように計画し、学習者に案内したところ、6名全員が＜ぐんぐんクラス＞に参加することになった。第2期、第3期の参加者からは、直接指導者に伝える、またはアンケートの記述回答で、続けて学びたいという要望が複数あった。短期集中であることが学習意欲の高まりを維持することに寄与したと思われる。

2. 自立を目指す日本語教室＜ぐんぐんクラス＞について

(1) アンケート結果から

コース終了時のアンケート結果からは、回答した学習者全員（6名）が「日本語を使うようになった」、「日本語が上手になった」、「日本で生活しやすくなった」、「日本の文化や習慣、社会についてもっとよく知ることができた」と回答した。また、授業の良かった点について「教材は日常生活に近い場面

を設定しており、そのまま普段の生活で活用できる。」「インタラクションが多く、覚えるのにとっても役立つ。」「(ロールプレイで)さまざまな役を演じることで、日本語の文脈や特定の場面での使い方をより深く理解できた。」などの記述があり、コースに対する評価は高かった。また、コースへの満足度については全員が5段階評価の「5」と回答し、かなり満足度が高かったと言える。また、今後の日本語学習の継続についても全員が5段階の「5」と回答し、今後の日本語学習への意欲も高いことが窺えた。

(2) 学習ポートフォリオから

①毎週作成するポートフォリオ「教室外の目標と振り返り」は、1週間の授業外の目標と自己評価、日本語でしたことを書くことになっており、自律的な学習のために役立てている。母語で書いてよいことを伝えており、当初は母語で書いている学習者も少なくなかったが、徐々に日本語で書く学習者が増え、最終日には1名を除き全員が日本語で書いていた。自分の目標や実際にやったことを翻訳機や教室スタッフの力を借りながら毎週書くことで、常に自身の日本語学習や日本語使用に意識的になっていた。また、日本語で書く経験を重ねることで、簡単なことであれば、支援を受けながら書きたいことを書くことができるようになった学習者が増えたと考えられる。

②最終日のポートフォリオ「コースのあとに」では、目標の自己評価と、もっとできるようになるための工夫を書いてもらった。例えば、読み書きについては、「新聞を読む」「日記を書く」「新しい単語をたくさん書いて覚える」など、各々の工夫が書かれていた。文字については、「スマホ」や「電子辞書」の使用が多く、すぐ調べる方法を持っていることがわかった。また、ほとんどの学習者が、単語、語彙の不足を課題として挙げており、日本語能力の向上に不可欠だと認識していた。「授業外」や「目標以外」の努力として、「日本のテレビ番組」や「YouTube」など身近なリソースを活用していることがわかった。

③今後の学習を考えるポートフォリオ「明日からのわたし」では、教室に来る前の状態、修了段階の状態、これからの目標とそのための努力について書いてもらった。全員(5名)が、教室に来る前は、知らないことが多く、日本語で話せない状態であったと書いていたが、修了段階では、「簡単な日本語でコミュニケーションが取れるようになった」、「知らない単語はすぐ調べて覚えるようになった」、「日常生活を自由にできる」等、日本語能力や自律学習の向上、生活の向上が挙げられていた。これからの目標については、「日本のドラマを字幕なしで見たい」、「日本人の友達が欲しい」等、日本での生活をより楽しむための目標が掲げられていた。これからの結果から、日本語能力、自律学習、学習意欲の向上に加えて、日本語を使用することに対する自信が高まったことも本取り組みの成果であると考えられる。

(3) コーディネーター・講師の観察から

初期の日本語学習を終えた学習者であっても、コース開始時には、コーディネーターや講師が日本語で話しかけても母語で答えることが多く、まだ日本語に自信のない様子だった。しかし、徐々に日本語で答えようとしたり、自ら日本語で話しかけてくれるようになった。毎週授業の最初に行うポートフォリオの時間に、ポートフォリオを日本語で書きたい学習者のサポートをし、母語で書いた場合には、その内容を簡単な日本語で質問するなど、日本語でのやり取りや読み書きの機会を増やした。こういった工夫により、コースを通して文字学習も含めた日本語使用への自信が向上し、日本語を使う頻度の増加にもつながった。

また、地域のイベントに参加して交流するための機会として、授業内では、「近所のイベントを探す」(第11回)、「知り合いをイベントに誘う」(第12回)、「日本語教室を探す」(第15回)をテーマに、実際の地域のイベントや教室のチラシを使用して授業を行った。授業で扱ったイベントや教室について、学習者が興味を示し、詳しい情報を知ろうとするなど、コミュニティ参加に対する関心を高めることが

できた。さらに、日本語学習者も参加できるイベントを積極的に紹介し、参加を促した。例えば、学習院大学主催の地域日本語教育研修「共生社会を生きるためのコミュニケーション講座」（「学習院大学グランドデザイン 2039」の一環）の「地域交流プログラム」や、取組3として行った参加型シンポジウムには、複数の学習者が参加した。学習者がそれぞれのプログラムを楽しんでいる様子が見られ、「本当に日本語で交流した。いいきっかけだ。」「いろんな人と交流して楽しかった。」（いずれも研修のアンケートより）等の感想を得た。コースの受講が学び続ける意欲につながっただけでなく、地域社会への参入意欲にもつながったことがわかる。

3. 特定のニーズ及び課題の充足について

特定のニーズは、生活上必要となる読み書き能力の基礎、日本語学習を支える読み書き能力を身に付けることである。

(1)「初期集中日本語教室」では、各課のテーマに合う読むこと、書くことに関わる Can do を補充したうえで、教材についても、Can do に対応する練習が不足していた部分は新規で作成した。さらに、学習方法に関する情報提供の時間に、特に文字学習に関するリソースを学習者のニーズに合わせて提案した。例えば、国際交流基金の提供するリソースの中から、マドリッド日本文化センター作成のスペイン語で提供されているコンテンツや、バンコク日本文化センター作成のタイ語で提供されているコンテンツなど、学習者の母語で提供されているものである。

(2)「自立を目指す日本語教室」では、各授業において可能な範囲で文字学習や読み書きの活動を取り入れた。例えば、「病院で診察を受ける・処方箋薬局に行く」（第3回）では、正しく服用できるように薬袋の情報を読み取る、「プレゼントを選ぶ・買う」（第8回）では、プレゼントに添えるメッセージカードを書く、「好きな物について話す」（第12回）では、Web上の掲示板に書き込む、「近所のイベントを探す」（第10回）、「日本語教室を探す」（第14回）等で、チラシやウェブサイトの情報から必要な情報を探し出す、メールで申し込む、「冬の思い出の料理を紹介する」（第16、17回）では、紹介したい料理について調べる、ポスターにまとめて書く、など多様な媒体を使った「読む」「書く」活動を行った。その他、母語での記入も可能なポートフォリオやアンケートを日本語で書く学習者が増えていったことは、日本語で書きたいという学習者の主体性を受け止め、日本語の表現を教えたり、調べる方法を紹介するなどのサポートがあったからだ考える。

(2) 今後の改善点について

1. 「初期集中日本語教室」

・ 初期集中日本語教室を終えた後の学ぶ場所の不足

学習者は、2～3週間の短期集中のコースへの参加によって、日本語の基礎と学習習慣が身に付き、日本語学習の意欲も高まっていたが、コースを終えたあと、地域で学び続ける場所が十分にあるとはいえない。第1期に参加した学習者は、終了後すぐに「自立を目指す日本語教室」＜ぐんぐんクラス＞に参加できたが、2期と3期の学習者が終了後にすぐに参加できるようなコースは本学の体制では開講できないため、複数の学習者から初期集中日本語教室の続きはないのかという要望や問い合わせがあった。今後、学習継続が可能な教室の可否を検討し、他機関や豊島区との連携協力により、地域の日本語教育環境を一層整えていくことが必要である。

2. 「自立を目指す日本語教室」

(1) 文字学習に結び付く指導

自立を促す日本語教室では、学習者の日本語能力に配慮しながら授業内で生活に必要な「読む」「書く」活動を適宜入れていたが、今回の実施状況を踏まえ、授業外での文字への意識化や、授業内での「読む」「書く」活動をより多く取り入れられるように更なる工夫を加えたい。漢字圏・非漢字圏に関わらず、読み書きの得手不得手があり、学習者に応じた学習方法の紹介も検討したい。

(2) より自律的な学習に向かうための工夫

最終回のポートフォリオでは、全員が「単語」や「語彙」の不足を認識しており、そのための方法として「単語の勉強」「単語を覚える」が挙げられていた。授業で学習する語彙は限られているが、より自律的に学んでいくためにも各学習者にとって必要な語彙を増やすための工夫も必要である。

取組の成果の発信

【名称：参加型シンポジウム「日本語を学ぶ、日本語であらわす」の開催】

取組の目標	本事業の成果を一方的に紹介するのではなく、日本語学習者自身がその学びの成果を披露したり、外国人と日本人が直接交流する活動をシンポジウムに組み込み、シンポジウムへの参加が地域住民にとって魅力的なものとなるよう工夫する。また、日本語教室実施において協力を仰いだ団体・組織だけでなく、地域のエスニックコミュニティ、区民ひろばで活動する各種サークルにも積極的に広報を行う。地域日本語教育や外国人支援等の関係者以外の一般参加者を増やすことにより、生活者としての外国人に対する日本語教育に関する理解が深まることを目指す。今回は特に「文字による表現」活動を取り入れる。
内容	成果の発信・普及、住民の日本語教育への理解の促進を目指し、大きく以下の2つの活動を行った。 1. シンポジウムの開催 (1) 本事業の取組（日本語教育の実施）の報告 (2) 教室参加者（取組2）による成果報告と「文字」を取り入れたワークショップ 2. 取組2に関する報告（地域日本語教育関係の研究会等） ・日本語教育学会秋季大会（R6. 11. 16, 17 姫路で開催）の「交流ひろば」において、本事業の成果について報告し、意見交換を行った。 ・日本語教育方法研究会（R7. 3. 15 桜美林大学で開催）において、初期集中日本語教室の教材についてポスター発表を行い、意見交換を行った。
取組による特定のニーズに対する工夫	1. 文字学習を重視した初期集中日本語教室、自立を促す日本語教室の事例を広く周知するとともに、改善すべき点や応用可能性について意見交換を行った。実践の当事者として改善を進めると同時に、同様の実践を行う組織・地域との情報交換・意見交換を行い、初期指導段階での文字学習に関する課題解決に共に取り組んだ。 2. 日本語教室の参加者が文字学習の成果を直接的に示すことにより、学

		習意欲を高めると同時に、表現されたものを介した交流機会そのものを生み出した。同時に交流機会の生み出し方の一例を示した。	
実施期間	令和7年2月22日	時間数	1回 3.5時間 × 1回 =3.5時間
対象者	豊島区及び近隣地域の住民、 「生活者としての外国人」に 対する日本語教育関係者	参加者 人=実人数	総数 71人

(1) 特徴的な活動風景(2～3回分)

取組事例①

【シンポジウム第1部 令和7年2月22日 13:30-14:30】

第1部では、地域における日本語教育について、以下のように報告を行った。

1. 趣旨説明
2. 豊島区の多文化共生施策の現状
3. 学習院大学における地域日本語教育の取り組み
 - (1) 初期集中日本語教室
 - (2) 自立を目指す日本語教室

写真左：趣旨説明の様子

写真右：豊島区の多文化共生施策の現状の報告の様子



取組事例②

【シンポジウム第2部 令和7年2月22日 14:30-17:00】

第2部は、「日本語ワークショップ」と題し、以下のような交流の場を作った。

1. 学んだことを発表しよう

区内日本語教室・学習支援教室で学ぶ生活者の皆さんの成果物を展示し、教室参加者と来場者がやり取りを行いながら交流した。

2. みんなで「かるた」をつくろう

関原彩先生（学習院大学講師）を講師に迎え、「かるた」の歴史や遊び方の説明を聞いたうえで、学習院大学競技かるた同好会に所属していた卒業生による競技かるたの実演を見学した。その後、グルー

プで協力しながら、「かるた」の読み札、取り札を作成し、最後に作成した「かるた」を使ってかるた遊びを体験し、交流した。

写真左上：各教室の成果物を見ながら交流する様子

写真右上：競技かるたの実演を見学する様子

写真左下：「かるた」を作成している様子

写真右下：作成した「かるた」を使ってかるた遊びで交流する様子



(2) 目標の達成状況・成果（取組による特定のニーズの充足）

1. シンポジウムの開催

(1) 地域住民の参加について

シンポジウム参加者 71 名のうち、これまで地域日本語教育と関わりのない地域住民（一般参加者）は 12 人（約 17%）であった。全員が第 2 部の日本語ワークショップに参加した。アンケートの感想からは「勉強になった。皆様の努力に感動した。チャンスがあったら、区民として自分の力で協力していきたい。」、「大変興味深い内容。国籍、年令、多種多様で、有意義だった。」、「長く豊島区に住んでいても、これだけ外国人の方が多いということを知らなかった。こういった機会があればぜひ参加したい。」等、概ね好評であった。一般参加者にとっても魅力的なものであり、地域日本語教育への理解の促進に役立ったと考える。一般参加者の増加は、豊島区の広報誌「広報としま」や豊島区 HP の他、区内の各地域にある「区民ひろば」にもチラシを配布するなど、広報先を広げた成果であると考えられる。

(2) 外国人当事者の参加について

当事者である外国人の参加については、6 か国 17 人（24%）が参加し、参加者全体の 1/4 となった。日本語ワークショップとして行った『『かるた』をつくろう』では、各グループに外国人参加者が必ず 1 ～2 名入り、交流しながら「かるた」を作成し、かるた取りを楽しむ様子が見られた。日本語学習者によるアンケートには、ワークショップについて「楽しい。かるたというゲームについてたくさんのことを学んだ。（原文英語）」、「誰もが考えさせられ、ゲームを通じてお互いの理解を深めることができた。（原文中国語）」、「もっと日本の文化と社会的な事柄について学びたいと思う。（原文中国語）」といった感想・意見が寄せられた。また、「もっとこのようなイベントに参加したいと思う。」、「また参加したい。とても楽しかった。（原文英語）」、「このような活動がとても好きだ。（原文中国語）」など、このような交流への参加を希望する声が多く聞かれた。

(3) アンケート結果から

「新しい情報や知識」が「たくさんあった」、「あった」を選択した人は全体の約 9 割で、「地域の日本語教育についての理解」についても「おおいに深まった」、「深まった」を選択した人は約 8 割だった。シンポジウムへの参加を通して、新しい情報や知識を得ることができ、地域の日本語教育についての理解が深まった人が多かったことから、本シンポジウムへの満足度が高かったと考えられる。

2. 取組2に関する報告（地域日本語教育関係の研究会等）

日本語教育学会秋季大会（R6. 11. 16, 17 姫路で開催）の「交流ひろば」において、本事業の成果について報告し、意見交換を行った。これにより、多くの方が疑問に思ったり、興味を持ったりする点が明らかになった。内容についての質問に加え、教材の公開を望む声が多く聞かれ、生活に必要な日本語として文字や読み書きを学べる教材に対するニーズの高さを知ることができた。

・日本語教育方法研究会（R7. 3. 15 桜美林大学で開催）において、初期集中日本語教室の教材についてポスター発表を行い、意見交換を行った。

3. 特定のニーズ及び課題の充足について

先述のシンポジウムにおいて、特定のニーズとして挙げた、生活上必要となる読み書き能力の基礎、日本語学習を支える読み書き能力を身に付けることを目指した日本語教室（初期集中日本語教室及び自立を目指した日本語教室）の報告を行った。併せて、授業内でのワークシートや作成したポスターを展

示し、学習者による説明も行った。シンポジウム参加者に地域日本語教育への理解を促す機会となっただけでなく、日本語の基礎を学ぶことの重要性、文字を学ぶ方法の多様性を知らせることができた。内容や方法を検討する機会を生み出すことを目指し、大学ホームページでシンポジウム実施報告及び、成果物として「異文化あるあるかるた」を公開予定である。公開により、同様の課題を抱える地域にとって何らかの参考となること、課題解決に向けた方策に関する意見交換が進むことを願っている。

(3) 今後の改善点について

「参加型」シンポジウムとして、日本語学習者の主に文字学習の成果物の展示や学習者自身の説明を聞く時間を設けたことにより、日本語教室等における具体的な活動の様子が伝えられ、在住外国人及びその日本語学習に関する理解の促進につながった。実施にあたり、「日本語ネットとしま」等を通じて学習者による成果発表を呼びかけたが、地域の日本語教室の活動において展示するような成果物がない、特に文字学習に関してはほとんどないという声があった。これは、生活者の日本語教育において、成果物が残るような、何かを作り上げる活動が少なく、そのために必要な「読み書き」にもあまり重点が置かれていないことが考えられる。日本語の「読み書き」は生活者にとって不要なのではなく、むしろ、日本での生活を支え、豊かにするための鍵となるものである。「読み書き」も含め、生活者としての日本語教育の課題を地域で共有し、共に検討していくことの重要性は今後さらに増していくはずである。課題解決を目指した日本語教育の実践、さらには、その成果を共有できる機会を積極的に設けていくことが望まれる。

「かるた」を作るワークショップは、地域日本語教育とこれまで関わりのない住民の方にも気軽に参加していただけるものとなり、外国人と日本人が楽しく交流しながら相互理解を進める活動として好評だった。引き続き、日本語教室等の学習の場や交流の場を広く公開し、日本語学習や交流の良さを知ってもらい、一般住民とのつながりを作っていけるよう、広報の工夫も検討していきたい。

4. 事業に対する評価について

(1) 事業の目的・目標

外国人が日本社会で十全な生活を送ることを目指した学習環境を整える。2024年度からは、文字に関わる能力、読み書き能力に焦点を当て、日本に暮らす外国人の生活しやすさが向上すること、日本語学習のしやすさが増すことを目指す。具体的には、以下を行う。

1. 日本語未習者及び学び直しが必要な学習者に対する初期集中日本語教育プログラムに連動させて、文字学習・読み書きの学習に重点を置いた授業を展開する。
2. 学習者が、文字学習の楽しさややりがいを感じられるようになり、生活の中で積極的に読み書きに取り組めるようになることを目指した授業を計画し、それに適した教材を作成する。

(2) 特定のニーズの充足に向けて試行した方法

＜特定のニーズ＞非漢字圏の在住外国人や中高年層の在住外国人のうち、日本語未習者、あるいは学習経験はあるものの文字の学習・習得に困難を抱える人が、生活上必要となる読み書き能力の基礎、日本

語学習を支える読み書き能力を身に付けること

(1)「初期集中日本語教室」では、カリキュラムの各課のテーマに合う読むこと、書くことに関わる Can do を補充したうえで、自主作成教材についても、Can do に対応する練習が不足していた部分は新規で作成した。さらに、学習方法に関する情報提供の時間に、特に文字学習に関するリソースを学習者のニーズに合わせて提案した。

(2) 自立を目指す日本語教室では、授業内で可能な範囲で文字学習や読み書きの活動を取り入れ、授業の前後で行うポートフォリオの時間に、日本語で書きたい学習者のために表現を教えたり、調べ方や学習リソースを紹介するなどのサポートを行った。

(3) シンポジウムにおいては、第一部で日本語教室の成果を報告し、第二部では特に文字学習の成果物を展示し、学習者が説明を行うことを通して、参加者と意見交換することができた。また、「かるた」作りのワークショップは、様々なレベルの日本語学習者も日本人と互いの文化や考え方・感じ方を学び合う時間となった。

(3) 目標の達成状況・成果（取組による特定のニーズの充足）

＜特定のニーズ＞非漢字圏の在住外国人や中高年層の在住外国人のうち、日本語未習者、あるいは学習経験はあるものの文字の学習・習得に困難を抱える人が、生活上必要となる読み書き能力の基礎、日本語学習を支える読み書き能力を身に付けること

(1) 初期集中日本語教室の授業の一環として、飲食店のメニューから読む必要のある文字を探す、区の施設の利用申込書に名前や住所などを書く、お礼のメッセージをスマホなどで入力するといった読み書きの活動を生活の場面と切り離さず、授業テーマと関連付けた形で取り入れた。また、文字学習に役立つ各種アプリを紹介・試用し、多様な学習方法に触れる経験をした。これらにより、初歩段階であっても、最低限の読み書きができると生活場面で役立つことを実感したり、文字学習の楽しさを味わったりすることができた。日本語の文字についてもっと学びたいという意見が、教師とのやり取りや、アンケートの回答でも散見され、文字・読み書き学習についての関心の高まりが見られた。

(2) 自立を目指す日本語教室でも、生活に必要な文字学習や読み書きの活動を取り入れた。授業前後のポートフォリオの時間に書く内容を引き出すような問いかけをしたり、母語でなく日本語でポートフォリオを書きたい学習者のためのサポートを行うことによって、教室内外での自律的な学習及び文字学習を促進することができた。

(4) 地域の関係者との連携による効果、成果等

1. 取組 2「日本語教育の実施」

(1) 初期集中日本語教室では、豊島区役所学習・スポーツ課職員や豊島区社会福祉協議会 CSW といった地域の外国人の支援に関わる関係者の見学の希望があり、都度受け入れた。

(2) 自立を目指す日本語教室＜ぐんぐんクラス＞では、豊島消防署の消防隊員の協力を得て、通報訓練と AED 訓練が実施できた。救急車を呼ぶ、AED を使うなどを行う頻度は高くないが、日本で安心・安全に生活する上では対応を知っておくべきであり、いずれも周りの人との協力が不可欠であるため、継続的に依頼してきており、学習者は真剣に取り組んでいた。東京芸術劇場には自立を目指す日本語教室＜

ぐんぐんクラス>で演劇ワークショップを3回実施していただき、言葉と身体を使った表現活動を行った。学習者はいつもより大きな声を出したり、ゲーム感覚で楽しく発話を繰り返したり、学習者同士で積極的に助け合ったりするなど、普段よりも緊張感が薄れ、のびのびと日本語を使う様子が見られた。

2. 取組3「成果の発信・普及、日本語教育理解の促進」

シンポジウムの実施にあたり、豊島区文化商工部学習・スポーツ課生涯学習グループ、豊島区政策経営部企画課、豊島区教育センター、豊島区教育委員会、区内日本語教室、外国人支援を行うNPO等、「日本語ネットとしま」会議開催時やメール等により、シンポジウム計画の説明、意見交換、協力依頼、参加呼びかけ等を行った。「日本語ネットとしま」関係者17名がシンポジウムに参加した。第1部「豊島区の多文化共生施策の現状」報告や、第2部「学んだことを発表しよう」での成果物の展示や学習者による説明等、運営に関する協力も得て、シンポジウムを開催することができた。

(5) 事業実施に当たっての周知・広報と、事業成果の地域への発信等について

1. 取組2「日本語教育の実施」

「初期日本語集中教室」、「自立をめざす日本語教室」について開講前にチラシを作成し、豊島区の協力で豊島区内施設、教育機関、窓口等に配置した。あわせて、大学ウェブサイト、豊島区日本語教室ページでも情報を公開したほか、教室Facebookでも広報を行った。

2. 取組3「成果の発信・普及、日本語教育理解の促進」

(1) シンポジウムについては、チラシを作成し、豊島区内を中心に配布した。豊島区学習・スポーツ課の協力により、毎年、豊島区施設、窓口、図書館等に配布しているが、今年度初めて区内26か所にある区民ひろばにもチラシの配置を依頼した。また、「日本語ネットとしま」については会議及びメールで参加、協力を呼びかけた。豊島区の無料学習支援教室のネットワークである「とこネット」や、区内の外国人支援等多文化に関わる団体のネットワークである「多文化としま」等へも広報を行った。豊島区の広報誌「広報としま」及びホームページ、大学ホームページ及び各種SNSによる周知を行った。さらに、外国人当事者の参加を促すために、区内で日本語を学ぶ学習者向けに、第2部ワークショップへの案内として、やさしい日本語・英語・中国語を併記した案内チラシを作成し、日本語教室で直接配布したり、「日本語ネットとしま」を通じて学習者に案内をした。また、シンポジウムの開催報告を大学HPで行い、より広く地域に発信した。なお、ワークショップで作成した「異文化あるあるかるた」は、今後公開を予定している。

(2) 取組2に関する報告として、日本語教育学会秋季大会(R6.11.16,17 姫路で開催)の「交流ひろば」において、本事業の成果について報告し、意見交換を行った。また、日本語教育方法研究会

(R7.3.15 桜美林大学で開催)において、初期集中日本語教室の教材についてポスター発表を行い、意見交換を行った。

(6) 今回のプログラム実施を通して得られた知見やノウハウ

1. 取組2「日本語教育の実施」

伝統的な文字学習(例:五十音を順番に教える)ではなく、生活場面に関連した文字指導を行うことで、学習意欲を保持しつつ文字学習を行うことができた。

2. 取組3「成果の発信・普及、日本語教育理解の促進」

シンポジウムに外国人当事者や地域日本語教育に関わりのない地域住民が参加しやすいワークショップとして、「かるた」を作成したが、かるたの歴史を紹介したり、競技かるたを披露したり、書道部による見本などを通して文字への関心を高めることができた。「異文化あるある」をテーマとし、外国人、日本人が話し合いながら作成することでお互いの文化を知る機会になった。外国人と日本人の交流や相互理解の場、外国人当事者の活躍の場として、また地域日本語教育の具体的な実践を知り体験できる場として実施することにより、地域日本語教育への理解につながった。

(7) 改善点、今後の課題について

学習者が初期集中日本語教室のコースを終えたあと、学び続ける場所が地域に十分にあるとはいえない。また、生活に必要な文字学習や読み書き学習のできる教室もない。今後、地域の関係機関・団体と引き続き連携し、日本語学習環境を一層整えていく必要がある。

また、漢字圏・非漢字圏に関わらず読み書きの習得状況には個人差が見られた。その原因を探りつつ、学習者の特性に応じた学習方法の検討や紹介を引き続き行っていきたい。

地域の日本語教室で学ぶ学習者にとって、学習の成果を披露するような機会が少ない。地域住民にとっても、学習者の学習成果を知る機会は少ない。また、地域住民と学習者が「教育・学習」以外の場で共に活動できるようなイベントを今後も検討し、日本語学習環境を整えていく必要がある。